

北川千紗さん(ヴァイオリン)

ラ・フォル・ジュルネ2018 LFJエリアコンサート

2018年5月4日(金・祝) 17:00
KITTE 1F アトリウム

フランス、ナント発祥のクラシック音楽祭ラ・フォル・ジュルネは、2005年に東京上陸以来今年で14回目を迎える。赤ちゃんからクラシック通まで幅広い方々に愛され、ゴールデンウィークの風物詩としてすっかり定着したラ・フォル・ジュルネ。5月4日、北川さんがKITTE1階で開かれたエリアコンサートで演奏を披露しました。

2017年のバルトーク国際ヴァイオリン・コンクールで審査員特別賞ほか3つの特別賞を受賞した北川千紗さんによる、バルトークの「コントラスト」。この曲は、普通に調弦されたヴァイオリンと、調弦を変えたもう一本のヴァイオリンを使う珍しい曲。クラリネット奏者も2本のクラリネットを使い分けていました。立ち見の方々から2階、3階でお聴きの方々まで、その迫りに息を飲むさすがの演奏でした。



<プログラム>

バルトーク:「コントラスト」Sz.111

ミヨー:ヴァイオリン、クラリネットとピアノのための組曲 op.157b

北川千紗(ヴァイオリン)、石井美由紀(ピアノ)

アレッサンドロ・ベヴェラリ(クラリネット)

Q&A

いつも笑顔で、人の笑顔を見るのが好き、という北川さんですが、この日は、堂々と、力強く、そして聴衆を引き込む演奏を披露してくれました。そんな北川さんの素顔に迫り、生の声を聴きたく、質問を投げかけました。丁寧な回答を読むと、真の北川さんが垣間見えた気がします。



Q1. 北川さんは、2017年のバルトーク国際ヴァイオリン・コンクールで審査員特別賞ほか3つの特別賞を受賞されました。今日のラ・フォル・ジュルネ エリアコンサートではバルトークの「コントラスト」を演奏されましたが、バルトークはどのような作曲家だと思いますか。

A1. バルトークの曲は、民謡や伝統的なハンガリー人の身体に染み込んでいる独特なリズム感を曲全体を通して感じられるように作曲されています。この特有のリズムはハンガリーの人々の血に脈々と流れているんだということが現地に行ってみてわかりました。バルトークはその自然なリズムを彼の曲に自然に登場させたのだと思います。ブダペストで行われたコンクールは、まだハンガリーを訪れたことのなかった私にとってとても貴重で新鮮な学びとなりました。

Q2. ラ・フォル・ジュルネで演奏されたミヨーという作曲家の魅力はどんなところにありますか。今日この曲を選ばれたのはどんな理由からですか。クラリネットとの三重奏はいかがでしたか。

A2. 彼の音楽にはある種ジョークのようなものが含まれていると思いました。ミヨーを選んだ経緯は、「バルトークの他にもう一曲弾ける時間があるので候補を挙げてみましょう」ということになり、私がトリオで出演すると決まったときに真っ先に弾いてみたいと思っていたこの曲を提案させていただきました。

自分自身クラリネットとアンサンブルすることが初めてで、弦楽器やピアノとは違うクラリネット奏者の息遣いや間を感じ取るのが難しかったですが、とても楽しくアンサンブルさせていただきました。

Q3. 北川さんがヴァイオリンを弾きたいと思ったのはいつ頃ですか。何がきっかけでしたか。これまで続けて来られて、結果を残せたのは何が理由だったと思いますか。



A3. 私がヴァイオリンを弾きたいと言ったのは3歳の頃、親戚の集まりで私の従姉妹が弾いていたのを見たとき、だそうです。物心ついた頃には始めていたような状態です。

きっかけはともあれ、音楽が心底好きだったことが小さい頃から変わらないので、今まで続けて来られたのだと思います。幼い頃から私を理解し育ててくださった先生方、上京後もご指導ご支援くださる方々に巡り合えたからこそ今の私があるのだと思います。

Q4. 4月に東京藝術大学の4年生となり、卒業まであと一年になりました。今年はどうな一年にしたいですか。

A4. 乗り越えるべき問題に向き合うことや、学生としての活動、個人的な音楽の勉強、色んな面でステージを一つ一つ丁寧に過ごすことが今私にできることだと思います。人生の分岐点になるこの1年を将来絶対に後悔しないよう自問自答しながら進みたいと思います。

Q5. 北川さんが目指す音楽家はどんな音楽家ですか。他のヴァイオリニストと差別化するとするとどんなヴァイオリニストになりたいですか。

A5. なかなか難しいかもしれませんが、私にしかできない音楽をして、その音楽を好きと言ってくれる方々に演奏を披露して喜んでくれたなら、自分が目指す演奏家として最高に幸せだと思います。差別化できているかわかりませんが、私は常々そのような演奏家になりたいと思っています。

Q6. 将来、指導者となることもお考えとのことですが、指導者になりたいと思われたきっかけは何ですか？何を伝えたい、どんな音楽家を育てたいとお考えですか？

A6. 高校時代、ある友人から「最近音楽が楽しくない」と真剣な悩みを相談された時、例えば指導者になるということの意味を考えるきっかけになりました。

演奏家として自身のスキルを極めていく一方で、演奏することが究極の自己表現だとすれば、どんな人にもある個性を消さないで、弾くことが辛くならないような生き活きとした表現者を育てられる指導者にもなってみたいと思いました。

Q7. 北川さんの素顔に迫りたいと思います。一番幸せだなあと思う時はどんな時ですか。自分を一番元気づけてくれるモノ(人、食べ物等)は何ですか。

A7. 好きな食べ物はポテトチップス、フライドポテト、、、ポテトですね。気を付けないと体重が増えます。笑
ボードゲームやクイズ好きで、カバンの中にゲームや本を持ち歩いています。時間が空くとひとりでもやっていますが仲間がいれば尚楽しいです。

幸せだなと思うときは、大勢集まってワイワイして笑い合っているときです。私を元気づけてくれるものは人の笑顔です。



写真は公式HPより

常々、素晴らしい演奏者はどうやって生まれるのかと疑問に感じ、奨学生にいろいろな質問を投げかけ、その答えを探りたいと思っていた。北川さんの回答を読んで、少し答えの手がかりが得られた気がする。まずは興味。素晴らしい演奏者の多くは3歳、4歳の幼少期に自分でこの楽器を弾きたい、弾かせてほしいと親に訴えている。ずっと心底音楽が好きで、練習を楽しんでいること。それを支え、導き、才能を伸ばす親と教師。そして素晴らしい演奏家でありながら皆が口を揃えるのが、研鑽。旺盛な好奇心、才能、周りの支え、大好きでいること。そして尽きぬ探求心と練習。北川さんの回答を読むと答えはそのあたりにある気がしてきた。

「第2回シンガポール国際ヴァイオリンコンクール」

2017年のバルトーク国際ヴァイオリン・コンクールで審査員特別賞ほか3つの特別賞を受賞した北川千紗さん。2018年1月28日~2月8日にシンガポールで開催された「第2回シンガポール国際ヴァイオリンコンクール」でも、第2位に輝いている。北川さんは聴衆賞も受賞した。

同コンクールには今回、事前審査に通過した34名のうち29名が出場、セミファイナルに12名(日本人2名)、ファイナルに6名(日本人2名)、グランドファイナルに3名(日本人1名)が駒を進めた。北川さんは、グランドファイナルでシベリウスの協奏曲をシンガポール交響楽団と共演した。



写真は公式HP、FBより

豆知識

バルトーク・ベーラ・ヴィクトル・ヤーノシュ (1881-1945)

国籍： ハンガリー

9歳で処女作を書き、11歳でピアノの公開演奏をする。

1899年、ブダペスト音楽院に入学。

次第にハンガリーの民謡に強い関心を抱くようになり、13,000曲の民謡を含んだ「ハンガリー民謡全集」として結実した。

1940年、ナチから逃れるためにアメリカに渡り、ニューヨークに居を構えるが、生活は厳しかった。大学で民族音楽の講義を持ったりもした。

1945年9月26日、ニューヨークの病院で息を引き取る。64歳だった。

民族的でありながらも現代的な手法を開拓し、高く厳しい精神性と鬱屈した響きの中激しい生命力を伴う傑作を多数残した。

